山下とおるのおんがくよもやま話

(338)

今年もびっくりオペラ公演だ！

関西圏の公共ホールの自主企画オペラで、トップの実績はまずびわ湖ホールだが、ここにもうひとつ、年1回の公演が見逃せないホールが出現した。兵庫県にあるが、西宮ではありません。川西市のみつなかホールだ。

オーケストラ・ピットの使用時は、423席と小さなホールだが、オペラ公演は今年で20年目とのことだ。最初のオペレッタ路線のころに、1度レハール作曲の、日本では上演が珍しい「ほほえみの国」を見に行ったことはあったが、筆者などはほとんど看過していた。

ところが昨年、イタリアのベル・カント・オペラの代表的な作曲家ドニゼッティの、日本での上演が珍しい「マリア・ストゥアルダ」を上演するというので、お手並み拝見とばかりに、出掛けた。これが実はものの見事な舞台だった！

そして今年―同作曲家シリーズ第2弾はこれまた珍しい「ラ・ファヴォリータ」とあったので、喜んで出掛けた。公演は2日間で、本来は初日のキャストで聴きたかったのだが、2日目（9月25日）を見た。

先に見た人たちのあまりの好評に、いささか不安感を覚えながら席に着いたが、開幕してすぐに歌手たちの見事な歌いぶりに驚くと共に、この知られざる名作の素晴らしさを満喫した。

メッゾ・ソプラノがヒロインのオペラだと、皆さんカルメンしかないみたいだ。ところがどっこい、こんな面白いオペラがあった。お話も分かりやすい。

戦功のご褒美に王様の愛人とは知らず、見初めた女性を所望。しかしその正体を知り、許した王様にも反発、揚げ句に心労の余り女性は亡くなるという悲劇。

音楽監督牧村邦彦さんの指揮、井原広樹さんの演出、歌手の皆さんの見事さ―全てが一体となった舞台に、いま一度大きな拍手を！

（演劇プロデューサー）

大阪日日新聞 10月13日